



TITLE:

超文的単位の設定とその構造をめぐって

AUTHOR(S):

山口, 巖

CITATION:

山口, 巖. 超文的単位の設定とその構造をめぐって. ことばの構造とことばの論理: 山口巖教授停年記念論文集 1998: 205-227

ISSUE DATE:

1998-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65824>

RIGHT:

超文的単位の設定とその構造をめぐる¹

§1 ここで超文的単位というのは、文字通り文より大きい、あるいは文の上位にある、単位のことである。そのようなものが果して単位として設定できるか否か、できるとすればそれはどのようにしてであるか、またその場合この単位はどのような性質を持ち、構造を持つものであるか、を考えてみようとするのが本稿の趣旨に外ならない²。

このような単位を設定しようとするのは、単なる理論的興味のみによるのではない。却って古代ロシア語における所謂不定人称文 (неопределенно-личные предложения)³ を考察しようとする過程で、このような超文的単位を設定する必要が生じて来たのである。何故なら人称文においてすら必しも一々主語を明示する必要をもたない古代ロシア語にあっては、所与の三人称複数形の動詞を述語として有する文が、果して本当に主語を有しないのか、あるいは主語が顕在化していないだけであるのかを、単なる勘にたよることなく判定する基準を得ることができるとすれば、不定人称文という範疇の設定に聊かなりとも客観性をもたせることができると期待されるからである。

明らかなようにこれを文のレベルにおいて決定することは困難であるから、もし文の上位に単位を設定することが可能となり、かつこの単位の内部に主語に該当するものが存在しないとすれば、当該の動詞は主語をもたないと判定することを得るであろう。

§2 さて超文的単位を文字通り文より大きい単位とする場合、それはパラグラフであるかも知れず、章あるいは巻であるかも知れない。そこにはさまざまな単位が考えられ、またそれらの単位間に一定の階層関係が立つことも考えられる⁴。従ってここで考えようとするのは、文より大きい単位でかつ最小のものに限られることにする。換言すればこれは

¹『人文』第24集 昭和53(1978)年 24-55頁。

²従来いわゆる text grammar については、種々な見解が述べられている。この場合テキストは一般にパロールに所属するものとされている。しかし、ラングとパロールを、ソシユールの意味において截然と区別し、相互に異質のものであるとして捉えることなく、同一の事柄の相異なる二面であると考え、しかもこの二面が相互に対立しつつも、一方では相互に滲透し合うものであるという立場をとるならば、ここでいう超文的単位を、一応ラングの単位であると規定しても差支えないであろう。この点については、すでにズガルがその可能性について、およびラングとしての超文的単位とパロールとの関係について、彼の網領的な論文において、同様の趣旨の主張を行っている。cf. Petr Sgall, K programu lingvistiky textu, *Slovo a Slovesnost*, 1973, XXXIV, 1, pp. 39-43; D. Viehweger, Úvahy ke grammatice textu: propoziční pojetí textu proti pojetí orientovanému k jednání, *Slovo a Slovesnost*, 1977, XXXVIII, 1, pp. 1-8.

³不定人称文は、They say ... のような汎称をあらわすものである。現代ロシア語ではこの場合、英語と異って主語の欠如が義務づけられているが、逆は真ではない。主語の欠如は必しもそれが不定人称文であることを、あらわすものではない。古代ロシア語の場合は、一般に主語を明示することが義務的ではない。

⁴L. M. シェチニナなどは、このような階層関係を考えているようである。cf. Jana Jiríčková, Sovětské příspěvky k lingvistice textu, *Slovo a Slovesnost*, 1976, XXXVII, 2, p. 165.

文の直接上位にある単位である。

いまこのような単位が設定されたとする。適当な用語がないままにこれを仮に「話」と呼ぶことにし、差当りこれを次のように規定することにする。

「話」とは、年代記その他の叙述の中で一つの事件乃至テーマについて述べている、一つまたはそれ以上の文から成る単位のうち、最小と考えられるものである。

§3 このように規定した「話」は未だ主観的な判断に委ねられる部分が多く、あいまいである。このような規定の曖昧さや主観性のために、個々の「話」がどこから始まるかは、必しも一義的には定め難い。しかし一義的に決定できる場合もある。例えば年代記の場合、項の始めは「話」のはじまりであり、項の終りは同時に「話」の終りでもある。

従って一つの文のはじめが項のはじめと一致し、かつこの文の末尾が項の終りと一致する特別の場合には、「話」は一義的に定まる。

例えば、

1. въ лѣто 6528 родися володимиръ сынъ у ярослава. 203/19⁵(6528 = AD 1020)⁶

Anno 6528 natus est Volodimirus filius Jaroslavo.⁷

このように一つの文から成る「話」を仮に「単文話」と称することにする。これは文のレベルにおける「単語文」に相当する。

§4 以上の外、仮令項の半ばであっても、「話」のはじめであるとほぼ決定できる場合がある。Въ то же лѣто, Томъ же лѣтъ (eodem anno), Семь же лѣтъ (hoc anno) などで始まるものがこれである。例えば、

2. въ лѣто 6621 ходи ярослав на ятвягы сынъ святопѣльчъ и пришьдѣ съ воины поя дѣчери мстиславлю томъ же лѣтъ прѣставися сятопѣлькъ а

⁵底本として用いたのは、W. Budich, *Aspekt und verbale Zeitlichkeit in der I. Novgoroder Chronik*, Graz-Austria 1969. の巻末所収のものであり、例の末尾の数字はその頁数と行数を示している。本書は Академия Наук СССР, Институт истории の *Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов*, М.-Л. 1950. のシノダル本の復刻に外ならないが、Budich のものは、行数が明示してあって、検索に便なので、これを底本とすることにした。

⁶一般に古代ロシアでは、アレクサンドリアで用いられていた、いわゆる「天地開闢紀元」が使用されていた。ビザンチンではこれは西暦に5500年を加えたものであるが、ロシアで行われていたのはこれと8年ずれており、西暦に5508年を加えたものとなっている。

⁷例文には、一応ラテン語によるおき変えを行っている。これは、あくまでおき変えにすぎず、訳ではないことを、特に断っておきたい。敢てラテン語によるおき変えを試みたのは、本稿の趣旨からして、原文の構造をなるべく保つ必要があったからである。又不定人称文との関連から、主語を必ず必要とする現代語では、そこに訳者の解釈が入り込むからである。

この点で、主語を必要とし、また語順が比較的かたい英語を用いることをしなかった。

ノヴゴロド年代記には R. Michell と N. Forbes の英訳 *The Chronicle of Novgorod*, Academic International, 1970. があるが、これを使用しなかったのは、以上の理由の外、意味を通りやすくするために、接続詞その他が恣意的に用いられているからである。

володимиръ сѣдѣ на столѣ кыевѣ *въ се же лѣто* прѣставися давидъ
игоревиць *семь же лѣтъ* побѣди мѣстислав на бору чюдъ *въ то же*
лѣто погорѣ онъ полъ на сеи же сторонѣ городъ кромьныи откукинъ
пожаръ. 208/6–12 (6621 = AD 1113)

*anno 6621 egressus est Jaroslavus contra gentem Jatvjagos filius Svjatoslavi
et reveniens ex bello duxit (sibi uxorem) filiam Mstislavi eodem anno disces-
sit Svjatopolcus et Volodimirus sedi (in sellam ducis) in urbe Kievo hoc anno
discessit Davidus filius Igori hoc anno vicit Mstislavus apud fines Bor gentem
Tzudi eodem anno incensa est ultra pars (fluminis) citraque urbs Kromina a
incensione Lucae.*⁸

この外これに類するものとして、例えば *на ту же зиму* (*eadem hieme*), *тои же весне* (*eodem vere*) などがある。例えば、

3. *въ лѣто 6559 победи изяслав съ вяцеславомъ гюргя у переяславля
июля 17 на ту же зиму* преставися княгини изсзславляя..... 216/36–37
(6559 = AD 1051)

*anno 6559 vicit Izjaslavus cum Vjatzeslavo Georgium apud urbem Perejaslavi
post diem tertium Idus Quinctiles eadem hieme discessit uxor ducis Izjaslavi...*

4. *въ лѣто 6664 выгнаша новъгородьци судила ис посаднищства и
по том изгнании 5-и день умре и потом даша посаднищство якуну
мирославицю тои же весне* прѣставися архиепископъ нифонтъ априля
въ 21..... 217/27–30 (6664 = AD 1156)

*anno 6664 amoverunt Novgordienses Sudilam ab magistratu et post eius amo-
tionem quinto die mortuus est et posthoc dederunt magistratum Jacuno filio
Miroslavi eodem vere discessit archiepiscopus Niphontus post diem nonum Idus
Apriles...*

§5 以上「話」のはじまりと考えられるものについて考察して来たが、「話」のはじめ
が決定できる場合には、「話」の終りも、あるものについては決定することが可能である。
「話」のはじめの直前が前の「話」の末尾であることは殆んど自明だからである。

⁸底本には、大文字や句読点が入っているが、本来古代ロシアの年代記の場合、単語毎の区切りも行わない、
いわゆる *сплошный шрифт* によって書かれるのが普通である。従って現在刊行されているテキストの句読
点は、すべて編者の解釈によるものである。本稿の趣旨は、「話」が形式的に決定できるか否かにあるから、こ
の句読点は一切省略してある。このため底本とは異った読み方も可能だと思われる箇所が一再ならずみとめられ
る。このような可能性を排除しないため、ラテン語におきかえる場合にも、固有名詞を大文字にした外は、一切
句読点を付していない。またラテン語では無理と思われる語順乃至は表現もあえて変更することはしなかった。

このようにして「話」の始めと終りが、あるものについて確定できたとしても、このことから直ちに「すべて」の「話」のはじめと終りが決定したことにはならない。確定できた「話」のはじめと終りの中間に、別の「話」のはじめが存在する可能性を除外できないからである。既に述べたような典型的なものの外に、どのようなものが、どのような条件の下に「話」をはじめることができるのかについては、かなり詳細な議論を必要とするので、ここでは触れない。

§6 ところで「単文話」に対して複数の文から成る「複文話」を扱おうとすれば、これは「話」の内部構造に立入ることになる。その場合どうしても避けて通ることのできないのは「文」の規定である。後にみるように現代語においても「文」の概念は極めて不明確であるが、古代ロシア語の場合、これは更に曖昧である。従って古代ロシア語の場合、さしあたり次のように規定することにする。

「文」とは動詞から出発して支配・被支配、修飾・被修飾の関係に立つ成分、およびこの成分の何れかと同格の関係に立つ成分の全体を指す。

この規定からすれば、関係詞に導かれる副文章も、これが主文章と何らかの修飾関係に立つ限りにおいて、同一の文に帰属せしめられる。一方接続詞の場合には、これが結合する成分が、相互に同格(=等位)の関係にあると認められる時にのみ、文の内部に属するものと見做される。

§7 以上の限定をつけた上で「複文話」についてみれば、「話」の統合性を形式的に保証するのは、多くの場合接続詞である。例えば、

5. томъ же лѣтъ ходи всѣволодъ на българе съ всею областію своею и убиша българи князя глѣбовици изяслава. 225/25-26 (6691 = AD 1183)
eodem anno egressus est Vsevolodus contra gentem Bulgaros cum cuncta regione sua et occiderunt Bulgari ducem filium Glebi Izjaslavum.

この場合 и (et) の前の文の動詞 ходи (egressus est) の主語 всѣволодъ (Vsevolodus) と、и の後の文の動詞 убиша (occiderunt) の主語 българи (Bulgari) とは明らかに異っており、先述の文の規定から、これが二つの文から成る「複文話」であることを示している。このように等位接続詞で結ばれている「複文話」を「列状複話」と呼ぶことにする。

これに対し次のような文中の и は、これによって結合される部分の動詞の主語が同一であるから、両者は同格関係に立ち、従ってこの例文は「複文話」ではなく、「複文」であると見なされる。すなわち「単文話」である。

例えば、

6. тои же весне оженися князь мѣстиславъ новгородѣ и поя у якуна

дъщерь у мирославица. 223/4-6 (6684 = AD 1176)

eodem vere nuptias fecit dux Mstislavus in urbe Novgorodo et duxit (in matrimonium) ex Jacuno filiam ex filio Miloslavi.

次のような場合、*и* によって結合される各部分の動詞は、その数において異ってはいるが、これもまた「複文」とであると見做される。

7. в лѣто 6720 *ходи* мѣстислав на чюдѣ рекомую тѣрму съ новгородѣци *и* много *полониша* скота бещисла *приведоша*. 240/24-25 (6720 = AD 1212)
 anno 6720 egressus est Mstislavus contra gentem Tzudi quae dicitur Turma cum Novgorodiensibus et multos (captivos) ceperunt pecora(que) innumerabilia adduxerunt.

この場合 *и* 以下の部分の動詞 *полониша* (ceperunt) 及び *приведоша* (adduxerunt) の主語は *мѣстислав съ новгородѣци* (Mstislavus cum Novgordiensibus) であると解せられ、従ってより前の部分の動詞 *ходи* (egressus est) の主語たる *мѣстиславъ* は、*и* より後の部分の主語の一部としてこれに含まれると考えられるからである。

時には *и* の前後の部分の主語の同一性が「*съ*+造格」の句によって形式的に保証されていない場合もある。このような場合にも前の例に準じて「複文」と見做される。例えば、

8. на ту же зиму *приде* князь мѣстислав мѣстиславиць на тѣржѣкъ *и* *изма* дворянѣ свызтослави *и* посадника *оковаша* а товары ихъ кого рука доидеть. 239/26-28 (6718 = AD 1210)
 eadem hieme advenit dux Mstislavus filius Mstislavi ad urbem Torzhok et cepit viros nobiles Svjatoslavi et magistrum catenis vinxerunt, et (rapuerunt) mercem eorum quamlibet manu attingerent.

§8 このような規定の仕方には、当然反論が予想される。例6は「単純拡大文」простое распространенное предложение、例5は「等位複文」сложносочиненное предложение に過ぎないとするものである。そしてこれは亦、従来の慣行でもあった。

これに対して例5を「列状複話」とし、例6を「複文」とすることによって、両者を相異なるレベルに属せしめようとするのは、大きく言って三つの理由がある。

第一に述語動詞が殆んど義務的に主語を必要とし、これを欠く場合にも文脈から主語が確定されることを要する現代語の場合には、例5と例6のような場合は「形式的」にも明確に区別し得る可能性を有しているからである⁹。しかし古代語の場合必しも主語が明示されることを要しないから、例6の *и* 以下の部分も、独立の文としての資格を有している。

⁹ 現代語の場合、実際には必しも常に区別できるとは限らない例も数多く存在する。

この限り意味的にはどうであれ、少くとも形式的には例5と例6とは区別がつけられない。形式的に両者の区別を行うとすれば、述語動詞の主語が同一であるか否かという規準による外はない。

第二は理論の体系性である。例6における *и* が *оженися* と *поя* という動詞だけを接続しているのか、それともその各々を中心とする文を結合しているのかについては、十分に明確ではなく、議論の余地を残している。前者の立場をとればこれは「単純拡大文」に過ぎないことになる。後者の立場に立てばこれは「等位複文」ということになるであろう。古代語の統辞論の体系性という見地からすれば、後者の立場をとる方が、理論的整合性は優れていると思われる。

§9 第三に例5のような場合、*и* の使用が極めて限られている現代語の場合には、これを「等位複文」として、かなり明確に規定することができるかもしれないが¹⁰、*и* を多用する古代語にあつては、複文の範囲は極めて曖昧なものにならざるを得ない。例えば、

9. въ лѣто 6677 иде даньслав лазутиниць за волокъ даньникомъ съ дружиною и присла андрѣи пълкъ свои на нь и бишася с ними и бѣше новгородъци 400 а суждальць 7000 и пособи богъ новгородцемъ и паде ихъ 300 и 1000 а новгородъць 15 муж и отступиша новгородъци и опять воротивъшеся възся всю дань а на суждальскихъ смърдѣхъ другую и придоша сторови вси въ то же лѣта... 221/14-19 (6677 = AD1169)

anno 6677 transgressus est Danislavus filius Lazutini trans Tractum (ut) publicanus cum clientibus et admisit Andreius manum suam contra eum et poelium fecerunt cum eis et erant Novgorodienses quadrigenti Suzdalensium autem septem milia et adiuvit Deus Novgorodienses et interfecti sunt eorum tricenti et mille attamen e Novgorodiensibus quindecim viri et decesserunt Novgorodienses et rursum revertentes ceperunt omnem tributum atque ab incolis Suzdalensibus (tributum) alterum et revererunt omnes salvi eodem anno...

明らかなようにこの例の場合、*и* によって結合せられる文をすべて一つの等位複文と見做す立場をとれば、*въ то же лѣто...* までのものを一つの文と見做さなければならなくなる。むしろこれを独立の文が *и* によって結合され、より高次の単位を構成すると考えた方が、より客観的で整然とした体系が得られるであろう。この立場を選ぶならば、例5はやはり「複話」であるとするのが妥当である。年代記の編者の施した句読法をみれば、例9のような場合は、いくつかの「複文」の集合体と考えているようであるが、一方伝統的な統辞論は例5のような場合を一個の「等位複文」としている。このような混乱は、「話」と「文」のレヴェルの混同に基く為であると考えれば、少くとも理論的には回避すること

¹⁰ これについても必しもそうでない例が多く存在する。

が可能である。「話」の設定の意味の一つは、このようなところにもあるということができよう。

§10 *и* に次いでよく用いられる等位接続詞に *a* (*autem*, *atque*) がある。

例えば、

10. въ то же лѣто на зиму иде въ русь архиепископъ нифонтъ съ лучшими мужи и заста кыяны съ черниговьци стояще противу собѣ и множество вои и божиею волею съмиришася *a* мирославъ прѣставися до владыкы генуаря въ 28 *a* епископъ приде феурря въ 4 *a* посадничество даша косянтину микульницу новгородѣ. 211/38–212/5 (6643 = AD 1135)

eodem anno hieme iter fecit in Russiam archiepiscopus Niphontus cum bonis viris et vidit Kievenses cum Tzernigovensibus stantes contra suos et multos exercitus et Dei voluntate reconciliati sunt Miroslavus autem discessit ante (reveniendum) episcopum ante diem quintum Kalendas Februarias atque magistratum dederunt Constantino filio Mikuli in urbe Novgorodo.

接続詞 *a* にも *и* と同じくレヴェルの問題があるが、今はこれに触れない。「話」の立場からすれば、「列状複話」をつくる *a* は *и* のように直線的な時間的あるいは因果的序列は構成しないものの、なお全体として相互に関連のある一連の事件として、「話」を構成する際に用いられるように思われる。この点に関連して、次のような例の存在は興味深い。

11. въ то же лѣто бысть знамение въ солнци якоже погыбе *a* на осень прѣставися ольгъ сынъ святославль августа въ 1 *a* новѣгородѣ измроша коня вся у мѣстислава и у дружины его том же лѣтѣ..... 208/17–20 (6623 = AD 1115)

eodem anno apparuit signum in sole sicut pereat atque in autumnno discessit Olegus filius Svi(j)atoslavi Kalendiis Sextilibus in Novgorodo atque mortui sunt omnes equi apud Miloslavum ac apud eius clientes eodem anno.....

この例にみられるように、年代記では一般に天変は克明に記録され、またそのあとには殆んど常に地異、災厄等禍々しい事件が多く接続詞 *a* を伴って続くのが通例である。従ってここでも *a* によって結合された部分が相互に関連しているものとして提示されていることはほぼ確実である。

この外「列状複話」を構成するものとして、*тѣгда* (*tum*)、*тѣгда же* (*eodem tempore*)、*и тѣгда* (*tumque*)、*потомъ* (*postea*)、*потомъ же* (*postea autem*) 等が、屢々みとめられる。

§11 以上の外、接続のために屢々用いられるものに、*бо(enim)*がある。例えば、

12. том же лѣтѣ избиша плъсковици чюдѣ поморьскую пришли *бо* бяху въ 7 шнекъ и оболочилися около порога въ озеро и удариша на не плъсковици и не упустиша ни мужа а шнеке привезоша плъскову въ городъ. 227/29–32 (6698 = AD 1190)

eodem anno interfecerunt Pliskovienses gentem Tzudi maritimam advenerant *enim* septem navibus et praetereuntes rapiditatem (fluminis) (intraverant) lacum et oppugnaverunt eos Pliskovienses et praetermiserunt neminem atque naves adportaverunt in urbem.

この場合 *пришли бо бяху* (advenerant enim) 以下の部分は、それ以前の部分の内容の説明である。このことはこの部分に *пришли бяху* のような大過去の形、あるいは次の例にみられるような未完了過去の形が、しばしばみとめられることから、明らかである。古代ロシア語の場合、これらの時称が多く事件の背景の説明に用いられているからである。例えば、

13. и убиша сбыхку волосовица и негочевица завиди и моислава поповица сами путники а друзии кунами ся откупиша *творяхуть бо* я съвѣтъ държаше на свою братью а то богови судити. 229/26–30 (6702 = AD1194)

et occiderunt Sbishka filium Volosovi et filium Negotza Zavidum et Moislavum filium Popovi ipsi coviatores et alii denariis se redemerunt *putavissent enim* eos dolum (malum) habentes (i.e. habere) contra suos fratres sed hoc deo iudicandum est.

この場合 *творяхуть* は文字通りには未完了過去 (putabant) である。

従ってこれらの文は、文のレベルにおける従属文に相当するといえる。このような「従属話」をもつものを「層状複話」と呼ぶことにする。

§12 「層状複話」の中で最も著しいのは、会話を含むものである。これは *яко(quod)* によって導かれることもあるが、多くの場合は何等の接続詞に導かれることなく現れる。

例えば、

14. и съдумавъше князь и людѣ на пути въспятишася на дубровьнѣ и еще рекъше *не проливаиме крови съ своею братьею нѣгли боꝝ управити своим промысломъ*. 213/6–8 (6645 = AD 1137)

et consilium capientes dux populusque in itinere reverterunt in vico Dubrovna

et etiam dicentes *ne hauriamus sanguinem cum fratris suis (i.e. nostris) ut Deus constituat (res) sua providentia.*

15. того же лѣта прислаша внуци ростислави въ новѣгородѣ къ мѣстиславу мѣстиславицю *се не творить намъ всеволодъ святославиць части въ русьской земли а поиди пощемъ своеи отцины.* 241/8–10 (6722 = AD 1214)

eodem anno adlegaverunt (legatos) nepotes Rostislavi in urbem Novgorodum ad Mstislavum filium Mstislavi ecce non dat nobis Vsevolodus filius Svjatoslavi heredium in terra Russiae veni quaeramus (sibi) patrimonium nostrum.

会話の文ではないにもかかわらず、接続詞に導かれることなく「層状複話」を構成する場合も、屢々みとめられる。たとえば、

16. на то же осень зѣло страшно бысть *громъ и мѣлния градъ же яко яблковъ* боле мѣсяця ноября въ 7 день въ час 5 ноци. 218/17–19 (6665 = AD 1157)

eodem autumnno valde horrendum fuit tonitrus et fulmen grando autem maior malo (fuit) mense Novembre ante diem septimum Idus in hora noctis quinta.

17. той же ноци бысть знамение въ лунѣ *вся погыбе въ заутрънюю пакы напълнися* феураp. 216/31–32 (6657 = AD 1149)

eadem nocte apparuit signum in luna tota defecit in horis matutinis rursum plena facta est (mense) Februario.

18. въ то же лѣто приходиша ѣмъ и воеваша область новгородьскую *избиша я ладожане 400 и не пустиша ни мужа.* 214/31–33 (6650 = AD 1142)

eodem anno venerunt gens Emi et occupaverunt regionem Novgorodiensem occiderunt eos Ladogenses quadrigentos et praetermiserunt neminem.

時には「従属話」が更にその内部に「従属話」を含むこともある。例えば、

19. зажьжеся пожаръ новегородѣ въ недѣлю на всѣхъ святыхъ в говѣние идуче въ заутрънюю *загорися савѣкине дворе на ярышеевъ улицы и бѣше пожаръ зѣлъ съгорѣша церкви 10 святого василия сватыя троиця святого въздвижения и много домовъ добрыхъ и уаша у лукини улицы.* 229/14–18 (6702 = AD 1194)

conflagravit incendium in urbe Novgorodo die dominica omnium sanctorum

(omnibus) in ieiunium entibus in horis matutinis *inflammare coepit domus Sav-
cae in via Jarisheva et erat incendium perniciosum incensae sunt ecclesiae
decem Sancti Vasilii Sanctae Trinitatis Sanctae Rurrectionis et mul-
tae domus nobilium et extinxerunt apud viam Lucae.*

この文において *бяхе пожаръ зълъ* (erat incendium perniciosum) と *загорѣся* (inflammare coepit) が時称の相違にも拘わらず等位であるのは、接続詞の存在によって明らかである。また *сѣгорѣша* (incensae sunt) と *уаша* (extinxerunt) はその時称と数から等位であるが、*загорѣся* (inflammare coepit) と *сѣгорѣша* (incensae sunt) とは数が異っている。このような構造をみれば、*сѣгорѣша* 以下が *бяхе пожаръ зълъ* の「従属話」であるとみるのが至当である。また一方 *загорѣся* 以下は、*зажъжѣся пожаръ* (conflagravit incendium) の説明敷衍であって、「従属話」であると見做される。このように解すれば、*загорѣся* の前、及び *сѣгорѣша* の前に接続詞のないこともよく理解できる。

このようにしてみれば、接続詞のないことが、却って両者の関係を緊密にし、「従属話」を構成する一つの形式的特徴をなすと思われて来る。

§13 次に興味のあるのは、感嘆文を含む「話」である。例えば、

20. въ лѣто 6632 мѣсяця августа въ 11 день передъ вечернею почя убы-
вати солнца и погыбе всѣ *о великѣ стратѣ* и тѣма бысть и звѣзды быша
и мѣсяць и пакы начя прибывать и въ бързѣ напълнися и ради быша
вси по граду. 209/19-22 (6632 = AD 1124)

anno 6632 mense Sextili ante diem quartum Idus ante vespervas coepit deficere
sol et defecit totus *o timor magnus* tenebraeque fuerunt et stellae apparuerunt
lunaque et iterum coepit augescere et post paulo plenus factus est itaque delec-
taverunt omnes in tota urbe.

21. новгородци же поставиша пълъкъ противу ихъ у звѣринця на къзем-
ли и пособи богъ глѣбу князю съ новгородци *о велика бяхе стѣя вожа-
номъ* и паде ихъ бещисльное число а самого князя отпустиши бога
дѣля. 205/29-32 (6577 = AD 1069)

Novgorodienses autem duxerunt exercitum contra eos apud pagum Zverinetz
in terra Kzemli et adiuvit Deus Glebum ducem cum Novgorodiensibus *o acre
erat proelium exercitibus Bozhanae* et occisa fuit eorum innumerabilis multitudo
attamen ipsum ducem liberaverunt Dei gratia.

例 20 及び例 21 の感嘆文の両側の文は、内容的に直結しており、従って感嘆文は、恰か

も文のレベルにおける間投詞と同じように、周囲から独立している。これを「間投話」と名付けることにする。

この種の「間投話」は、「層状複話」を成分とする「列状複話」というような、複雑な構造をとることもある。例えば、

22. о горѣ тогда братъе бяше дѣти свое даяхуть одѣренъ и поставиша сукдельницу и наметаша полную о горѣ бяше по тръгу трупи по улицамъ трупи по полю трупи не можаху пси изѣдати челоуѣкъ. 242/16–19 (6723 = AD 1215)

O miseria tum fratribus erat pueros suos (servos) dabant sine pretio et con-
diderunt sepulcrum et iniecerunt (in eum) plenum o miseria erat in foro cadavera
in viis cadavera in campo cadavera non poterant canes comedere (omnia
cadavera) hominum.

このような例の存在によって、感嘆文はそれだけで「話」を構成することができることが判明する。これは間投詞が文のレベルにおいてそれ自身独立して文をなすことができることに相当する。

§14 この外年代記には接続詞に相当するものが全く存在しないにも拘わらず、「従属話」と考えることのできないものがある。

例えば、

23. того же лѣта приде из володимира архепископъ митрофанъ и провадиша и новгородци къ святѣи богородици благоушещию поиде мѣстиславъ въ русь новгородци же послашася смольнску по святослава по ростиславици и приде в новъгородъ мѣсяця августа въ 1. 245/38–246/4 (6726 = AD 1218)

eodem anno advenit ab urbe Volodimiri archiepiscopus Mitrophanus et prae-
ierunt ei Novgorodienses in (monasterium) Sanctae Deiparae Anuntiationis pro-
fectus est Mstislavus in Russiam Novgorodienses autem miserunt in urbem
Smolensk (arcessitum) Svjatoslavum filium Rostilavi et advenit ad urbem Nov-
gorodum Kalendis Sextilibus.

24. того же лѣта прислаша внуци ростислави въ новъгородъ къ мѣстиславу мѣстиславицю се не творить намъ всеволодъ святославиць части въ русьской земли а поиди поищемъ своеи отчины мѣстиславъ же съзва вѣче на ярослави дворѣ и почя звати новгородче кыеву на всѣволода чърмьнаго *рекоша* ему новгородци камо княже очима позриши ты

тамо мы глазами своими вържемъ 241/8-13 (6722 = AD 1214)

eodem anno miserunt legatos nepotes Rostislavi in urbem Novgorodum ad Mstislavum filium Mstislavi ecce non dat nobis Vsevolodus filius Svjatoslavi heredium in terra Russiae itaque veni quaeramus (nobis) patrimonium nostrum Mstislavus autem vocavit consilium in domum Jaroslavi et coepit provocare ad Novgorodienses (ut impetum facerunt) in urbem Kiev adversus Vsevolodum Rufum *dixerunt* ei Novgorodienses quo dux vertes oculos tu eo nos (quoque) caput nostrum vertemus.

年代記のテキストの編者はこのような場合何れも大文字にしてここから新たな文（乃至「話」）を始めている。この種のものには、итти (eo) あるいはこれから派生される動詞が最も多い。たとえば、

25. томъ же дни въведоша въ дворъ арсению църница съ хутина мужа добра и зѣло бояшася бога *приде* князь ярославъ от брата и иде съ всею областію къ колываню и повоева всю землю чюдъскую а полона приведе бещисла нѣ города не взяша злата много възъша и *придоша* вси съдрави *поиде* князь ярослав съ княгынею и съ дѣтми переяслаю. 249/13-18 (6731 = AD 1223)

eodem die duxerunt in domum Arsenium monachum ex pago Khutina virum bonum valdeque reveritum Deum *advenit* dux Jaroslavus a fratre et profectus cum cuncta regione in urbem Kolibani et occupavit terram gentis Tzudi atque captivorum adduxit multitudinem attamen urbem non occupaverunt auri multum rapuerunt et revererunt omnes salvi *profectus est* dux Jaroslavus cum uxore et cum pueris ad urbem Perejaslavli.

これを年代記全集編者の見解に従って、全く新しい「話」の始まりとみるのか、あるいは、接続詞の欠如の故に、先行の文と緊密な関係を保って、両者の間に「従属関係」ではないにせよ、強い因果関係があることを表示しているのかについては、なお検討の要がある。例 24 の *рекоша* (*dixerunt*) はこの後者の可能性が濃厚である。

§15 これに類するものとしては、たとえば次のような諸例を挙げることができる。

たとえば、

26. князь же святослав присла свои тысяцькыи на вѣче рече не могу быти съ твърдиславомъ и отъймаю от него посадниѣство *рекоша* же новгородѣци е ли вина его онъ же рече безъ вины *рече* твърдислав тому есмъ радъ оже вины моеи нѣту а вы братье въ посадниѣствѣ и въ

князѣхъ. 247/10-15 (6726 = AD 1218)

dux autem Svjatoslavus misit suum chiliarchum ad comitias dixit non possum esse cum Tverdislavo et amovebo ab eo magistratum dixerant autem Novgorodienses si quid esset delictum eius ille tum dixit sine delicto *dixit* Tverdislavus eo sum laetus quod delectum meum non est atque vos fratres (vestra sponte designare potestis) magistrum ducemve.

27. том же лѣтѣ иде князь всеволодъ съ новгородьци къ пертуеву и устретоша стороже нѣмьци литва либъ бишася и пособи богъ новгородьцемъ *идоша* подь городъ и стояша 2 недѣли не взяша города и придоша сторови. 247/36-248/1 (6727 = AD 1219)

eodem anno profectus est dux Vsevolodus cum Novgorodiensibus ad urbem Pertuev et concurrerunt (cum eis) custodes Germanici Lithuanici et Livoniani et proeliati sunt atque adiuvit Deus Novgorodienses *pervenerunt* (usque) ad urbem (ubi) constiterunt quattuordecim dies non occupaverunt urbem et revererunt salvi.

これらの場合、文の結合度は **и** によって結合されるよりは、却って高いと考えられる。この方向の一つの極限が、列挙の場合、あるいは次の例にみられるような、対句的表現であると考えられる。例えば、

28. бысть же се мѣсяця генваря въ 27 на святого иоанна златоуста и тако быша вѣча по всю недѣлю нѣ *богомъ дияволъ поправъ быша и святою софиею крестъ възвеличяъ бысть* и съидошася братья въкупѣ однодушно и крестъ цѣловаша. 247/7-10 (6726 = AD 1218)

quod autem fuit mense Januario ante diem sextem Kalendas Februarias die Dominicum sed *Deo diabolus punitus est Sanctaque Sophia Crux laudatus est* et congressi sunt fratres simul (et) una et crucem osculati sunt.

このような場合は、むしろ「等位複文」と考えた方がよいようにさえ思われる。接続詞を欠く場合のこのような結合度の高さが、「話」において「従属話」の一つの形式的表現となったのだとすれば、よく理解することができる。

§16 以上極めて大まかに超文的単位として「話」を設定した場合、それがどのような構造を持ち得るのかについて考察してきた。結果は「話」の単位としての形式が、なお主観的な曖昧さを払拭し切れないにも拘わらず、可成りの程度に明瞭であると考えた根拠を与えた。

これらの事情を考えれば、少なくとも古代語の場合書き手は文というよりは、むしろ「話」を念頭において文章を作っていたといってもよいのではないかと考えられる。このことによって、現代語の観点からすれば冗漫であり、殆んど稚拙ともいべき接続詞の多用も、実は個々の文の「話」への帰属をこれによって形式的に表現し、保証するものに外ならなかったと考えることができる。年代記全集編者によるテキストの編纂も、大よそはこれまで述べてきたような、「話」の構造に沿った形で行われていたことが判明するのである。

もとよりこれまで述べて来たのは、ごく大雑把なアイデアに過ぎない。細部にわたっては未だ検討すべき多くのものを残している。しかしこのような文の上位にある「話」を単位として採用すれば、これまで雑然としているかに見えていた諸現象が、整然とした形で立ちあらわれて来る可能性も存在するように思われる。またこのような「話」の構造と、現代語の統辞論的諸現象をつき合わせることによって、例えば paratax から hypotax への発展の道程に新たな視点を提供することが可能となるかも知れない。

更に現代語において、「話」にあたるものが設定できるかどうかとも問題となるであろう。この範疇をもし現代語に拡張することができるとすれば、これは現代語の統辞論それ自身にも、新たな角度からこれを見直す可能性を与えることができるかも知れない。

§17 ロシア語の場合、多くの学者は「等位複文」*сложносочиненное предложение* 及び「従属複文」*сложноподчиненное предложение* の外に、いわゆる「無接続詞複文」*бессоюзное сложное предложение* という範疇を立てている。しかしその形式的特徴は極めて曖昧であるから、この種の複文を明示的に規定するために、意義的にこれに対応すると考えられる等位複文あるいは従属複文を構成し、これを比較するという方法を採用。比較という規準の導入である。たとえば、

29. бог их простит в сии век и в будущий не их то дело но сатаны лукавого (Аввакум, *Житие*).

Deus eos ignoscat in hac vita illaque non (enim) hoc est facinus eorum sed (facinus) satan astuti (Monachi Avvakum, *Vita*).

のような文に対して

29'. бог их простит... *заче* (quia) не их то дело...

のような接続詞を伴う文が考えられることから、例文 29 をこれとの比較において、複文としようとするものである¹¹。

¹¹例えば、В. И. Борковский, *Сравнительно-исторический синтаксис восточнославянских языков. Бессоюзные сложные предложения сопоставляемые со сложноподчиненными*, Москва 1972, p. 35.

このように意義的に平行する等位複文あるいは従属複文との比較を主要な規範として導入する場合、このような複文はかなりの程度に恣意的に作ることができるから、「無接続詞複文」なるものの範囲も勢い恣意的にならざるを得ない。これらの文の間の関係を同一のレベルで処理しようとせず、形式的に完結した文をすべて独立の文であるとみとめ、これら相互の関係をより高次の単位乃至レベルにおいて規定するという方法をとった方が、むしろ理論体系としてはすっきりするように思われてならない。

§18 現代ロシア語においても、「無接続詞複文」は統辞論の一つの範疇として立てられている。

グヴォズデフの所説に従ってこれを大まかに示せば¹²、次のようになる。

I 主語相当節

30. Ночь была до ужаса тиха, Казалось, (что) город не дышит, лежит во тьме и ждет. (Инбер, *Почти три года*)¹³

The-night was awfully calm. It-seemed, (that) the-City does not breathe, it-lies in the darkness and is-waiting. (Inber, *Almost for Three Years*¹⁴)

II 述語相当節

31. География Такунчи такова (что) около устья река подмывает высокую террасу, основание которой складывается из красных глинистых сланцев (Арсеньев, *Дерсу Узала*)

Geography of Takunchi is such: (that) near the-mouth the-river undermines high terrace, the-base of-which consists of beo(a)utiful shale. (Arse-niev, *Dersu Uzala*)

III 補語相当節

32. Думал, (что) случайный ветерок шевельнул старым листом, — а это вылетела первая бабочка... (Пришвин, *Времена года*)

He-thought, (that) a chance breeze has moved an old leaf — but it was the first butterfly flying out... (Prishvin, *Seasons of a Year*)

¹² А. И. Гвоздев, *Современный русский литературный язык*, ч. 2. Синтаксис, Москва 1973, pp. 299 & seq.

¹³ 原文の用語・用字、送りは若干変更している。

¹⁴ 以下例 40 に至るまでの英訳は拙訳である。なお、この訳に当っては英語教室の渡辺久義氏に色々御教示をいただいた。記して篤く御礼申上げる次第である。

IV 規定語相当節

33. Около огня двигались люди; я узнал Дерсу — он (= который) поправлял дрова. (Арсеньев, *Дерсу Узала*).

Around the-fire (there) were moving people; I recognized Dersu — he (= who) was-setting firewoods (aright). (Arseniev, *Dersu Uzala*)

V 状況語相当節

- 1) 原因・内容を示すもの。

34. я несчастлив: (потому что) каждый день гость. (Письма Чехова)

I am unhappy: (because) every day guests (come to me). (Chekhov, *Letters*)

- 2) 行為の様態をあらわすもの。

35. Так было жарко, (как будто) вода в пруде закипела. (Вересаев, *На пожарище*)

It-was as hot, (as if) water in the-pool had-begun-to-boil. (Veresaev, *On the Site after a Fire*)

- 3) 結果を示すもの。

36. Солнце дымное встает — (поэтому) будет день горячий. (Твардовский, *Еще про Данилу*)

The smoky sun is-rising — (so) the-day will-be hot. (Tvardovskij, *Again about Danila*)

- 4) 時間をあらわすもの。

37. (Когда) Кончится война, поеду в Киев, — думал Лева. (Эренбург, *Буря*)

(When) the War-will-have-been-stopped, I-will-go to Kiev — thought Leva. (Erenburg, *Storm*)

- 5) 条件をあらわすもの。

38. (Если) Будете в театре — заходите. (Федин, *Первые радости*)

(If) you-will-go to theater — call-on-me. (Fedin, *The First Joy*)

6) 譲歩をあらわすもの。

39. (Хотя) Давно пора бы каждому свернуть своей дорогою, — они рядом идут. (Некрасов, *Кому на Руси жить хорошо*)
 (Though) long-since it-would-be-high-time for each-man to turn to his-own way — they are-going side-by-side. (Nekrasov, *Who can be happy and free in Russia?*)

§19 これ等の例文をみる限り、現代語の無接続詞複文は、形式的にも意義的にも極めて明確であるかのような印象を受ける。しかし実例についてみれば、これは単なる印象ではない。例えば、

40. Вадим круто повернул в сторону, отъехал прочь, слез, привязал коня к толстой березе и сел на землю; прислонясь к березе, сложа руки на груди, он смотрел на приготовления казаков, на их беззаботную веселость: вдруг его взор упал на одну из кибиток; рогожа была откинута, и он увидел... о, если б вы знал, что он увидел? во-первых, из нее показалась седая, лысая, желтая, исчерченная морщинами, угрюмая голова старика лет шестидесяти или более; его взгляд был мрачен, но благороден, исполнен этой холодной гордости, которая иногда рождается с нами, но чаще дается воспитанием, образуется от продолжительной привычки повелевать себе подобными. (Лермонтов, *Вадим*)

Vadim abruptly turned aside, rode (a little way) off, dismounted, tied his horse to a great birch tree and sat down on the ground; leaning against the birch, folding his arms on his breast, he looked at the cossacks preparing (their meal), (at) their careless gaieties; suddenly his glance fell upon one of the covered wagons: its mat was wide open, and he saw... Oh, if you could know what he saw! at first, out of it appeared a gray-haired, bald, yellow-skinned, wrinkled, gloomy head of an old man of about sixty years old or more; his eyes were sombre, but noble, filled with that cold arrogance which is sometimes seen among us, but often is bred by education, or formed by the long habit of commanding those who are similar to himself. (Lermontov, *Vadim*)

これは最初が大文字で始められ、かつ終止符で終わっている。従って従来の句読法によれば、これは一つの文でなければならない。

この構造を文のレベルで処理することは、比較の規準の導入を以ってすれば、比較的容易である。たとえば、

40'. *После того как* Вадим круто повернул в сторону, отъехал прочь, слез, привязал коня к толстой березе и сел на землю *и когда*, прислонясь к березе, сложа руки на груди, он смотрел на приготовления казаков, на их беззаботную веселость, вдруг его взор упал на одну из кибиток, рогожа которой была откинута, и он увидел... о, если б вы знал, что он увидел? *что*, во-первых, из нее показалась седая, лысая, желтая, исчерченная морщинами, угрюмая голова старика лет шестидесяти или более, взгляд *которого* был мрачен, но благороден, исполнен этой холодной гордости, которая иногда родится с нами, но чаще дается воспитанием, образуется от продолжительной привычки повелевать себе подобными. (Лермонтов, Вадим)

When Vadim turned aside ... and when, leaning against the birch ... he looked at the cossacks preparing (their meal) ... suddenly his glance fell upon one of the covered wagons, mat of which was wide open and he saw ... that at first ... an old man ... whose eyes were sombre...

しかしこのようにして得られた文は、もとの文と比較して極めて不自然な感じを受ける。それは恐らく例 40' の場合、主文章が、下線の部分になることと、関係があると思われる。即ち主文章で表わされるものは、文の中心的な内容を担わねばならないにも拘わらず、例 40' の場合、これが全体の叙述の中心をなすとは考えられないのである。これと関連するが第二点として更に重要なことは、例 40' においては、原文の有する線条性が失われることである。

このように例 40 のようなものを、専ら文のレベルのみで処理しようとすれば、論理的にはともかく、この箇所と言主の意図が損われることになるのは避けられない。

§20 これに対して例 40 を一つの「話」として、形式的に完結している部分をそれぞれ独立の文と見做したらどうであろうか。例えばこれは次のようになると思われる。

40". Вадим круто повернул в сторону, отъехал прочь, слез, привязал коня к толстой березе и сел на землю/ прислонясь к березе, сложа руки на груди, он смотрел на приготовления казаков, на их беззаботную веселость/ вдруг его взор упал на одну из кибиток/ рогожа была откинута, и он увидел... /о, если б вы знал, что он увидел? /во-первых, из нее показалась седая, лысая, желтая, исчерченная морщинами, угрюмая голова старика лет шестидесяти или более/ его взгляд был мрачен, но благороден, исполнен этой холодной гордости, которая иногда родится с нами, но чаще дается воспитанием, образуется от

продолжительной привычки повелевать себе подобными. (Лермонтов, *Вадим*)

明らかにこの場合、表現の線条性は完全に保証される。また *О, если б вы знали что он увидел?* という文も「間投話」として容易に処理することができる。各部分の文をすべて小文字で始めること、スリードッツ、コロン、セミコロンなどの記号などは、「話」の一体性を保証する技法であると考えることができる。グヴォズデフは、これらの句読点がイントネーションの相違に対応していることを示唆している。これは極めて単純な「無接続詞複文」の場合にはかなり明瞭であったとしても、上例のように規模が大きく、また複雑な構成をもっている場合にも妥当するか否か聊か疑問なしとはしない。識者の御高見を乞いたいところである。

勿論これはすべての作家に通じることではない。作家によっては文法的な文が夫々独立している文章を多用する傾向をもつものもある。また同一の作家においても、作品の文体、あるいは作品中の箇所によって、このような傾向を示すこともある。

このような種々の場合にも「話」が設定できるか否か、設定できるとすれば、その場合の形式的特徴は何か、あるいはまた、「話」の形式と文体乃至作家あるいは作品の意図との間に何等かの相関的關係が立つか否か、などを明らかにすることが、今後必要とされよう。

§21 例えばトルストイの場合には、一般に「話」と文とをできるだけ一致させようとする志向が極めて著るしい。例えば、

41. Старый, запущенный палаццо с высокими лепными плафонами и фресками на стенах, с мозаичными полами, с тяжелыми желтыми штофными гардинами на высоких окнах, вазами на консолях и каминах, с резными дверями и с мрачными залами, увешанными картинами, — палаццо этот, после того как они переехали в него, самою своею внешностью поддерживал во Вронском приятное заблуждение, что он не столько русский помещик, егермейстер без службы, сколько просвещенный любитель и покровитель искусств, и сам — скромный художник, отрекшийся от света, связей, честолюбия для любимой женщины. (Л. Н. Толстой, *Анна Каренина*, т. 19-33)

The old, neglected palazzo with its lofty stucco ceilings and wall frescos, its mosaic floors and heavy yellow damask hangings at the windows, its vases standing on console-tables and mantelshelves, its carved doors and sombre reception-rooms hang with pictures — this palazzo, after they had moved into it, by its very appearance sustained Vronsky in the agreeable illusion that he was not so much a Russian landed proprietor and equerry without a post as an enlightened

connoisseur and patron of the arts, and, in his own modest way, a painter himself who had renounced the world, his connexions, and ambitions for the sake of the woman he loved. (L. N. Tolstoj, *Anna Karenin*¹⁵)

この最後の文は、独立した文ではあるが、同一の「話」への帰属は文頭の *и* によって保証されている。トルストイの文章が一般に立体的で長いのは、このような「話」と「文」とを一致させようとする志向のあらわれであるとして説明できる。

一方トルストイの場合でも既に述べたように「話」と「文」が必ずしも常に一致している訳ではない。このような場合にも、文の「話」への帰属は種々の手段によって保証されている。その一つは接続詞あるいはこれに準ずるものの使用である。例えば、

42. Степан Аркадьич, несмотря на свою либеральность, знал, что знакомство с Карениным не может не быть лестно, и потому угощал этим лучших приятелей. *Но* в эту минуту Константин Левин не в состоянии был чувствовать всего удовольствия этого знакомства. *Он* не видал Кити после памятного ему вечера, на котором он встретил Вронского, если не считать ту минуту, когда он увидал ее на большой дороге. *Он* в глубине души знал, что он ее увидит нынче здесь. *Но* он, подерживая в себе свободу мысли, старался уверить себя, что он не знает этого. *Теперь же*, когда он услышал, что она тут, он вдруг почувствовал такую радость и вместе такой страх что ему захватило дыхание, и он не мог выговорить того, что хотел сказать. (*Там же*, т. 18-403)

For all his liberal views, Oblonsky was well aware that to meet Karenin could not but be a flattering distinction, and so treated his best friends to that honour. *But* at that instant Levin was not in a condition to appreciate the gratification of such an acquaintance. *He* had not seen Kitty since that memorable evening when he had met Vronsky, not counting, that is, that one moment when he had had a glimpse of her in the carriage on the high road. *He* had known at the bottom of his heart that he would see her here today. *But* to maintain his freedom of thought, he had been trying persuade himself that he did not know it. Now, when he heard that she was here, he was suddenly conscious of such joy and at the same time such dread that he caught his breath and could not say what he wanted to. (*ibid.*)

§22 その二は例 42 にも一部イタリックを施したように、代名詞の使用による文相互の結

¹⁵ これ以降の英訳はすべて The Penguin Classics 所収のものによった。Leo Tolstoy, *Anna Karenin*, tr. by Rosemary Edmonds, 1969.

合性あるいはテーマの同一性の保証である。

たとえば、

43. *Она* была ни такая, как прежде, ни такая, как была в карете; *она* была совсем другая. *Она* была испуганная, робкая, пристыженная и оттого еще более прелестная. *Она* увидала его в то же мгновение, как он вошел в комнату. *Она* ждала его. *Она* обрадовалась и смутилась от своей радости до такой степени, что была минута, именно та, когда он подходил к хозяйке и опять взглянул на нее, что и ей, и ему, и Долли, которая все видела, казалось, что она не выдержит и заплачет. *Она* покраснела, побледнела, опять покраснела и замерла, чуть вздрагивая губами, ожидая его. Он подошел к *ней*, поклонился и молча протянул руку. Если бы не легкое дрожание губ и влажность, покрывавшая глаза и прибавившая им блеска, улыбка ее была почти спокойна, когда *она* сказала (*Там же*, т. 18–43)

She was not the same as before, nor as he had seen her in the carriage. *She* was quite different. *She* was scared, shy, shame-faced, and therefore all the more charming. *She* saw him the instant he entered the room. *She* had been waiting for him. *She* was filled with joy, and so confused at her own joy, that there was a moment — the moment when he went up to his hostess and glanced again at her — when she, and he, and Dolly, who saw it all, thought she would break down and burst into tears. Blushing and going pale by turns, *she* sat rigid, waiting with quivering lips for his approach. He went up to her, bowed, and silently held out his hand. Except for the slight quiver of her lips and the moist film that came over her eyes, making them appear brighter, her smile was almost calm as *she* said... (*ibid.*)

§23 第三は、それぞれの文に繰返しあらわれる同一あるいは類似の語、あるいは構文の反復によるものである。

たとえば、

44. Жить семье так, как привыкли жить отцы и деды, то есть в тех же условиях образования и в тех же воспитывать детей, было несомненно нужно. Это было *так же* нужно, как обедать, когда есть хочется; и для этого *так же* нужно, как приготовить обед, нужно было вести хозяйственную машину в Покровском так, чтобы были доходы. *Так*

же несомненно, как нужно отдать долг, нужно было держать родовую землю в таком положении, чтобы сын, получив ее в наследство, сказал так же спасибо отцу, как Левин говорил спасибо деду за все то, что он настроил и насадил. И для этого нужно было не отдавать землю внаймы, а самому хозяйничать, держать скотину, навозить поля, сажать леса. (Там же, т. 19-372)

For his family to live as his father and forefathers had been accustomed to live — that is, at the same cultural level — and so to bring up his children, was an undoubted necessity. It was just as necessary as eating when one was hungry. And for that, just as a meal has to be cooked, to Pokrovskoe must be farmed in such a manner as to yield an income. As surely as one must pay one's debts, so surely was it necessary to keep the patrimony in such a condition that when his son inherited it he would thank his father, as Levin had thanked his grandfather for all he had built and planted. And to do this he must not lease out the land but must farm it himself, must breed cattle, manure the fields, and plant woods. (ibid.)

§24 第四は述語動詞あるいは副詞相当語を前置する語順の転置によって、「話」の継続性を保証する方法である。例えば、

45. На другой день своего приезда он поехал с визитом к генерал-губернатору. На перекрестке у Газетного переулка, где всегда толпятся экипажи и извозчики, Алексей Александрович вдруг услышал свое имя, выкрикиваемое таким громким и веселым голосом, что он не мог не оглянуться. На углу тротуара в коротком модном пальто, с короткою водною шляпой набекрень, синяя улыбкой белых зуб между красными губами, веселый, молодой, сияющий, стоял Степан Аркадьич, решительно и настоятельно кричавший и требовавший остановки. Он держался одною рукой за окно остановившейся в углу кареты, из которой высывались женская голова в бархатной шляпе и две детские головки, и улыбался и манил рукой зятя. (Там же, т. 18-392.)

The day after his arrival he was driving back from calling on the Governor-general. At the Gazetny lane crossing, where there is always a crowd of vehicles, Karenin suddenly heard his name called in such a loud and cheerful voice that he could not help looking round. At the corner of the pavement, in a short, stylish overcoat and a low-crowned stylish hat on the side of his head, white

teeth gleaming between smiling red lips, young, gay, and beaming stood Oblonsky, vigorously and insistently shouting and demanding that Karenin should stop. *He* had one hand on the window of a carriage that had stopped at the corner of the street, and the heads of a lady in a velvet bonnet and two little children were thrust out of the window. With his other hand Oblonsky gaily beckoned to his brother-in-law. (*ibid.*)

通常はこれらの手段が色々に組み合わせられて「話」の統一性を保証していると考えられる。トルストイの場合、人物の描写、思想的な記述などの場合には重層的な文が使用され、事件の記述には比較的短い文を以ってこれを行う傾向をもっている。これはこれまで述べて来た「話」における線条性の問題と深く関わっていると考えられる。

作家間の相違、文体との関連などについては、述べるべき多くのことがあるが、これらについては、機会を得て考察するより外はない。

РЕЗЮМЕ

НЕКОТОРЫЕ СООБРАЖЕНИЯ ПО ПОВОДУ ОПРЕДЕЛЕНИЯ СУПРАСИНТАКСИЧЕСКОЙ ЕДИНИЦЫ И ЕЕ СТРУКТУРНОЙ ОСОБЕННОСТИ

Разыскание объективных критериев для определения так называемого неопределенно-личного предложения в древнерусском языке приводит нас к осознанию потребности в постановлении большей предложения единицы, имеющей какую-то свою собственно формальную особенность. Если постановление подобного рода единицы станет возможным, можно будет объективно отличать неопределенно-личное предложение от личного предложения с глаголом-сказуемым третьего лица множественного числа не опираясь на субъективное “языковое чутье” читающего. Ибо, в случае отсутствия внутри этой единицы слов, означающих лица и притом возможных стать подлежащим по отношению к глаголу-сказуемому данного предложения, принадлежность этого предложения к классу неопределенно-личных предложений станет несомненной. Данная работа посвящена именно этому вопросу. Потом, результаты, полученные от этого исследования, применяются к тексту современных писателей для того, чтобы испытывать применимость понятия этой супрасинтаксической единицы.